

令和3年度 第2回 屋久島世界遺産地域科学委員会  
ヤクシカ・ワーキンググループ及び特定鳥獣保護管理検討委員会合同会議  
議事概要

日時：令和4年1月31日(火) 13:30～16:30

場所：WEB 会議方式

議事（1）ヤクシカの生息状況等について

■主な意見

- ・（高層湿原で幼獣の撮影頭数が相当数減ったことと積雪の影響について）幼獣が1歳未満ということになると、繁殖特性から妊娠している個体は基本的に出産するのが一般的。積雪期間が長かったことと直接的に関係あるかどうかということには若干疑問に感じる。（鈴木委員）
  - ・9月～11月という2カ月弱くらいの調査期間で、9月は場所によっては暖かくて糞塊の消失速度がかなり速く、調査の前半と後半で糞の残り方に差が出てくる。前半と後半で観測される糞塊がどの程度あるかを一度見ておいたほうがいい。また、データの評価の仕方についても少し考慮したほうがいい。（濱崎委員）
  - ・以前から糞粒法のデータはかなり局所的に上がる傾向があり、鹿之沢小屋などでも時々高い値が出たりするが、西部でも今回は県有地がかなり高く、他のところでは低く出ている。（矢原座長）
  - ・糞粒法でも細かいデータを総合的に判断することはできる。どちらの方法でも全体を見ることができて、糞粒法が細かいところをしっかりと見ることができるかということ、必ずしもそうではない。（松田委員）
  - ・資料1-①の図6で生息密度が示されており、平成25年の半減密度の線が引かれている。これは河川界ごとの半減値なので、必ずしも低密度を示しているわけではない。屋久島全体での半減値を各河川界に示し、どこでどれだけ減らしていくか計画していただきたい。（八代田委員）
  - ・半減目標に対する現在の密度の変化は追跡できていて、比較的納得できるような状況。今後は半減目標との比較も目指していかなければいけないが、推定生息密度が高いところが見えてきているので、密度が下がり切っていない、あるいは反動的に上昇しているようなところに捕獲圧の重点を移していく必要がある。（濱崎委員）
  - ・中間は常に高密度で推移しているがこれがどのような要因によるのか。また、区分8の西部林道は年度ごとに大きく変動しているが、この変動の要因は何か。（船越委員）
- 中間の地点は捕獲圧が全くかかっていないこと、もう1つは海に近いので糞粒を分解する昆虫が少ないために過大評価になっていることが考えられる。西部の振動そのものはかなり前から普通に起きている。全体の個体密度に対する変動幅を分析してみると他のところとそれほど違いはないので、元の値が大きいために変動も大きく見える。（塩谷顧問）

議事（2）捕獲等の被害防止対策について

■主な意見

- ・シャープシューティング（以下、SS）というのは本来、何本もの林道を設定しておいてローテーションするもので、それぞれの林道に関しては一定の間隔を空けて連日行うというのが本来の運用になる。将来的には継続性を考慮した上で実施林道を増やししながら、得られた留意点を踏まえて捕獲数を上げ

ていく。(鈴木委員)

- ・資料 2-⑥の図 5、捕獲圧の影響では平成 26 年度と令和 3 年度の糞塊密度を比較しているが、平成 26 年度の糞塊密度は 28 年度や 29 年度の密度分布と比べてかなり高く出ている。この結果は高振れしているように思えるので、中央部やその他の地域も含めて糞塊密度の分布の変化を見る時には単年度の比較ではなく、これまでの傾向を連続的に評価していくことが必要。(濱崎委員)
  - ・安房林道のかかなり高いところにいるシカの糞にイネの DNA が出てくる。同定の精度には問題がないので、時には安房林道を下ってイネを食べて戻ってきていると考えないと説明がつかない。(矢原座長)
  - ・屋久島町では利活用の補助金が高く設定されているということだが、利活用されている頭数はどの程度で、増減の傾向はどうなのか。また処理施設の能力からすると、搬入される頭数が増えれば処理頭数も増やす余力はあるか。(濱崎委員)
- ジビエとして処理されているシカの頭数は年間 600 頭前後。傾向として横ばいである。猟師がよく行くところの頭数が減少して、山の深いところに入って行かなければならなくなり、高齢化もあってジビエの処理施設まで運ぶことが困難になってきている。処理施設として余力はあるが、1 日にたくさん処理できるわけではなく、天気がよい日にまとまって持ち込まれると断ることもある。(屋久島町)
- ・絶滅危惧植物や林床植生への回復状況といった生態系管理的な目標とのすり合わせも必要ではないか。絶滅危惧植物の量という点で、宮之浦流域より安房川流域のほうがはるかに希少種や絶滅危惧種が多いので、河川界区分 2 についてはもう少し捕獲圧を強めていただくと良い。(矢原座長)
  - ・絶滅危惧種や希少種、生態系に関する目標については区分ごとに特色があるので、それに応じてもう少し細かく区分ごとに生態系被害に対する取組を新たに加えて考えていく必要がある。(手塚委員)

### 議事（3）森林生態系の管理目標及びその他植生モニタリング等

#### ■主な意見

- ・資料 3-①表 4 の中間のデータを見ると、柵外の被度が高くなっている。シダ類が柵の中で減っているというのはシダ以外の他の植物、例えば低木が増えたために減ったのではないか。このデータを評価する上でシダの被度だけでなく柵の中の他の植物の被度や倒木などのデータも合わせて出しているだけだとより正確な判断ができる。(矢原座長)
- 令和 2 年の台風で柵内のイスノキの大木が倒れて柵内のプロットが日陰になった状況であった。(九州森林管理局、日林協)

### 議事（4）特定エリアの対策（西部地域）

#### ■主な意見

- ・令和 2 年と 3 年で何頭を捕獲したか。ブロックで頭数を取ったものが混ざって示されているようだが、分けて出すほうがよいのではないか。(杉浦委員)
- 昨年の西部の捕獲頭数は 24 頭。昨年と今年の合計は現時点で合計 29 頭。(環境省)
- ・現時点で雄 5 頭を捕獲したが、雌は囲いわなを警戒して入ってこない。周辺には雌や親子がよく見られる。(環境省)
  - ・柵内の植生回復状況を、手塚委員が川原と半山に設置している 15m×30m の 2 つのシカの防除柵との比較をしてほしい。(矢原座長)

- ・川原と半山の防除柵は設置後 10 年以上経過したが、1 年目は目立った変化はなく、最初はゆっくりした上がり方で、それからぐんと上がっていくような傾向だった。おそらく瀬切の柵内外でも種数がこれから増えていくだろう。(手塚委員)

## 議事（5）今後のヤクシカ管理方針等について

### ■主な意見

- ・雌の捕獲割合を高めることは非常に重要だが、雌を捕獲するためにまずは雄を捕獲するということもある。戦略によっては雄を優先することもあり得ることについて共通認識を持っていただきたい。(鈴木委員)
- ・捕獲したシカを加工処理施設に持っていくのが場所的に難しい場合には埋設になるが、タヌキが増えているという話もあり、捕獲後の埋設処理によってタヌキが増えている可能性もある。(八代田委員)
- 捕獲後の処理についてはまず施設搬入がある。可能な場合にはできるだけ施設に搬入するようにお願いしているが、国の補助金を使って払う場合には施設搬入のほうが若干金額は上がる。捕獲の場所にもよるが、施設搬入が難しい場所では埋設のお願いをしている。(屋久島町)
- ・今後、屋久島の中で SS という手法を、例えば規模やローテーションの仕方などについてはどういった展望で進めていくのか。(濱崎委員)
- 島での自走体制をつくることが第一。今現在は第一歩となる体制が構築できたところである。今後は中～高標高地域や世界遺産管理の核心となる場所への展開を目指す。安全かつ安定的に回せるということを第一に考えて、南西部で限定的にやっているような形を全体としていくつかの候補地をローテーションしながら進めていきたい。今回整理した視点について異論がなければ、各行政機関、関係者の皆さんと調整しながらできるところからしっかり進めていく。(環境省)
- ・ローテーションを回していくのに、人手や予算についてどのくらいの人数と時間が必要かという労力を数値として算出できる状態である。予算要求などの際には、労力をきちんと数値化して働きかけていただきたい。(鈴木委員)
- ・SS 事業に関連して、従来のわな猟、柵による捕獲、そして SS という 3 つについて費用対効果を比較すると、どれが一番効率的かということがはっきり分かる。試算でいいので次の会議で出していきたい。(荒田委員)
- ・費用対効果について 1 頭当たりかなり費用がかかるとしても、必ずしもそれが悪いとは言えない。麓でたくさん捕獲すると山岳部でも減少しているように思われるが必ずしもそうとも言えないので、それぞれの地域で進めていくことが重要。今の予算計画ではどのくらい捕獲できるかということ踏まえて考え、逆に今の予算ではどの程度までしか解決できないということが分かったら、それをきちんと書くことが重要。(松田委員)
- ・費用対効果の算出の時に単純に 1 頭当たりのコストだけで議論が進まないように。リスクが高い場所でリスク管理しながら実施する場合には、1 頭当たりの単価は高くなって当たり前ということがある。(鈴木委員)
- ・SS ありきということではなく、いろいろな方法をミックスする必要がある。SS はこれまでの実績があり、森林施業計画等と連携した実施が重要。糞粒調査で一湊林道上部という地点は高密度で減らない。ここは森林施業をしている場所だからである。施業した後が餌場になっていて、捕獲はされているがなかなか減少しない。森林施業の計画があるところに SS の計画を連携して SS を活用していった

はどうか。(手塚委員)

- ・SS については西部地区には果樹園が多いので時期を考えてほしい。11 月はミカンの収穫時期が近くなってサルの被害が増えるため、有害鳥獣の捕獲依頼も増える。同じ時期に誘引のために餌をまいたりすると、猟犬がシカの臭いのするほうに行つて邪魔をするということもあって、果樹園から今は駆除をしないでほしいという声が出ることもある。そういう意味で時期と場所の検討をお願いしたい。(大堀委員)

## 議事(6) その他

情報提供資料 1 矢原座長より、「屋久島の植物とヤクシカに関する研究の進展」について情報提供

情報提供資料 2 環境省より、雑誌国立公園 2021 年 12 月号の寄稿「国立公園のシカ管理を考える」について情報提供

- ・梶氏原稿にはイエローストーンでの議論も紹介されているが、元になっているのは 2 つの論文。イエローストーンでもナチュラル・レギュレーションを導入する以前に専門家から批判が出ており、いったんは導入されたが、ナチュラル・レギュレーションの考え方は続いていないということが書いてある。(松田委員)
- ・前回会議での調査報告について調べてみたが、ナチュラル・レギュレーションの考え方が頓挫している部分もある。昨年の報道ではナチュラル・レギュレーションがうまくいっていると読めなくもないような書き方がされていた側面があり、若干ミスリードではないかという気もする。このあたりについては、環境省も含めて正確な情報を提供してほしい。(鈴木委員)
- ・森林植生の回復のためにどうしたらいいかということをきちんと議論して結論を出していく必要がある。(手塚委員)
- ・原稿では、ナチュラル・レギュレーションが起こるかどうかの問題なのではなく、自然植生を維持するためにどういう密度にしなければいけないのかということが書かれてある。ナチュラル・レギュレーションが起こっているかどうかは、この委員会の場で議論すべきだが、それが最大の論点ではない。自然植生を維持するためにどの密度を維持すべきかを考えるべき。(松田委員)

情報提供資料 3 長瀬企画官より、「くくり罠による小林式誘引捕獲法」について情報提供